

ラーニング・コモンズの本質：ICT時代における
情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設としての図書館

The Essence of Learning Commons : The Library as an Infrastructure
to Promote Information Literacy / Open Education in the ICT Age.

山形大学学術情報基盤センター
Networking and Computing Service Center, Yamagata University

米澤 誠
YONEZAWA, Makoto

Abstract

We study the significance of learning commons as self-accessed learning spaces, new spaces in open education, and as spaces for recreation in universities by surveying discussions and examples of learning commons in Japan. Then we discuss elements of learning commons, and discuss how the nature of learning commons make them fundamental to promoting information literacy/open education in the ICT age.

Keywords: learning commons(ラーニング・コモンズ), library(図書館), information literacy(情報リテラシー), learning(学習), education(教育), open education(オープン教育), educational institution(教育施設)

はじめに

ラーニング・コモンズの定義や事例紹介，構成要素のモデルなどについては，すでに内外のさまざまな文献が論じており，多くは学習支援のための施設・設備として位置づけている。しかしそこには，大学などの高等教育機関（以下，総称して「大学」という）の教育の場としての可能性があると同時に，図書館の居住性を高める役割をもっていることが多い。

本稿ではまず，わが国におけるラーニング・コモンズ論の議論とその具体化の動向を中心に，学生の自主的学習の場，教育のオープン化にともなう新たな教育の場，大学における生活の場という3つの観点からその意義を考察する。そして，ラー

ニング・コモンズの構成要素を示したのち，ラーニング・コモンズの本質は，ICT（Information and Communication Technology）時代における情報リテラシー／オープン教育を実現するための基盤施設（インフラ）であることを論じる。

1. 学習の場としてのラーニング・コモンズ

1.1 自主的学習の場としての図書館とラーニング・コモンズ

大学の図書館は本来，自主的学習の資料と場を提供するという機能をもっている。ICT時代となった現在，その環境における学習を支援する施設・設備として生まれたのがラーニング・コモンズであるというのが，わが国での一般的見解であろう。

わが国ではじめてのラーニング・コモンズの動向レビュー文献以降、その基本的な見解は一貫しているといえる。再度確認すると、ラーニング・コモンズとは「学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料を提供する必要」から設置したものである。また特に、「図書館のインフォメーション・コモンズを多く利用するのは学部学生となり、図書館はそこに限定したサービス展開を行うことができるようになった」のがラーニング・コモンズの特色である¹⁾。

この「自主的学習を支援する」、「学部学生に限定する」という立場は、その後のラーニング・コモンズに関連する文献でも継承される。例えば、永田氏が代表である報告書では、「ラーニング・コモンズとは、従ってインフォメーション・コモンズをさらに展開して、学生の主体的な学習活動を重視したものだといえる」と論じている。さらにインフォメーション・コモンズとの差別化については、「とくに学生の学習・研究活動を向上させ十分な成果を獲得させるには、学生が必要とする人的支援が必要であり、そのような支援が備わっているインフォメーション・コモンズがとくに高い評価を得ている。これらがときに『ラーニング・コモンズ』と呼ばれることもある」と解説している²⁾。

井上氏も、ラーニング・コモンズは「『学習の場』としての図書館、創造的空間としての図書館を取り戻そうとする動きの中から生まれた」と論じ、さらに次のように大学における学びの変化にも着目している。「大学では（中略）一方的に講義を聴く従来の教育方法から脱皮し、グループ討議などコミュニケーション能力を重視して、問題を解決していく学習方法が注目を浴びている。つまり、『学びの身体技法』を知り、充実した学習体験を得られる場、これを図書館が提供したいのだ」と、図書館が学生に対して教育的機能を果たす可能性についても言及している³⁾。

1.2 ICT時代における学習教材・情報資源

図書館資料としては、いち早くICT化した電子ジャーナルや二次情報データベースをはじめとして、今や電子ブック、電子的レファレンスなど学

習教材に事欠かない状況となってきた。機関リポジトリの進展も、学習教材を豊富にしていくという意味で有意義である。

以上のような図書館が収集する情報資源のほかにも、教員が提供する電子シラバスや電子的教材、eラーニングのコンテンツや語学自習教材などの普及状況も視野に入れる必要がある。学生は、レポートなどの学習課題の作成の際だけではなく、学習そのものをICTで行わなければならない状況となりつつあるからである。図書館でも、各大学でのVLE（Virtual Learning Environment：仮想的学習環境）の導入状況・活用状況も確認して、学生がどのような学習行動をとっているかを知っておかなければならない。そして、VLEという学習環境を利用できるような、施設・設備を十分に備える必要があろう。

このことは、「(英国の調査報告書に) eラーニングの整備を促す戦略として、回答した高等教育機関の74%が「図書館／学習情報資源」をあげたことが示されている。これは、「授業と学習」戦略の95%に次いで第2位であり、学生の自主的学習を保証するためには、VLE利用において適切な図書館および学習情報資源の誘導が重要であるという認識に基づくものといえよう」と述べるわが国の報告書の見解とも、相応するものであろう⁴⁾。

1.3 自主的学習を支援するサービスの展開

筆者は、図書館が情報検索にとどまらず、本来の情報リテラシー教育を行う役割を果たすべきことを主張してきた。その一つの手法として、レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の再構築を提唱し、実践している⁵⁾。

大学教育の中で、学生に適切なレポート作成法を教授することは、適切に情報源を活用できる学生を育てるために必要不可欠である。しかし、正規の授業の中に標準的なレポート作成法の講義を実現するには、教育カリキュラムの改善検討・企画立案などの多大な労力と時間がかかってしまう。むしろ、図書館の講習会や相談サービスとして実施する方が、機動的であり実際的であると考えている。

金沢工業大学のライブラリーセンターでは、ライティングや学習支援のサポートを行っている

いう。近年では、東京女子大学や立教大学などの図書館がレポート作成や学習支援のサービスを開始している。このように教員や学生と協同した新たな学習支援サービスの展開は、ラーニング・コモンズの重要な構成要素であると考え⁶⁾。

さらに、語学という特定の分野であるが、神田外語大学のSALC (Self-Access Learning Center) におけるラーニングアドバイザーサポートは、優れた学習支援サービスとなっている。学生はSALCに常駐するアドバイザーに相談できるとともに、自主的に学習を進めるプログラム「BASIL」で自らの学習計画を立てることができる。「モジュール」という各種学習パッケージで、自分の弱点を克服することもできる。その他、語学教材や視聴覚資料も備え、施設内での会話は英語に限定したこのセンターは、総体として「自立型学習者」を育成する最適のラーニング・コモンズとなっている⁷⁾ (写真1, 2)。



写真1 神田外語大学 SALC



写真2 SALCの語学教材

2. 教育の場としてのラーニング・コモンズ

2.1 高等教育のオープン化

ラーニング・コモンズの動向とともに、近年注目すべきはアクティブラーニングの動向である。東京大学のアクティブラーニングの取り組みの中で、その学習を展開する施設・設備としてのスタジオが、ラーニング・コモンズと一部類縁の機能をもっているからである⁸⁾。

大学では今、一斉授業により教科書の知識を教え込む講義形式の授業から、体験学習・総合学習により多様な学習メディアを使って、個性を尊重し主体的に学ぶ教育への展開を図っている。例えば東京大学の提唱するアクティブラーニングは、『読解・作文・討論・問題解決などの活動において分析・統合・評価のような高次思考課題を行う学習』であり、学習者が能動的に授業に関与する必要があるため、『アクティブラーニング』と呼ばれている。ひらたくいうと、単純に知識を記憶するだけでなく、深く考えさせる活動を授業の中に組み込むということ⁹⁾。

じつは、現代の大学で進展しているこのような取り組みは、小中高の学校教育では早くから採り入れられており、「教育システムのオープン化」として認知されている。従来の学校が「生活集団や学級集団が固定され、内容や方法が画一化された一斉指導中心の教育システムをとっていた」のに対し、オープンな教育システム（以下「オープン教育」という）では「内容が総合的、選択的となり、方法として集団・時間・形態・場所等を弾力化することにより、一人一人の興味、進捗、発達度等の違いに対応するとともに、自ら学ぶ力の成長や個性の伸長を図ることが目的とされ」ているのである¹⁰⁾。(図1, 2) 大学で進展している

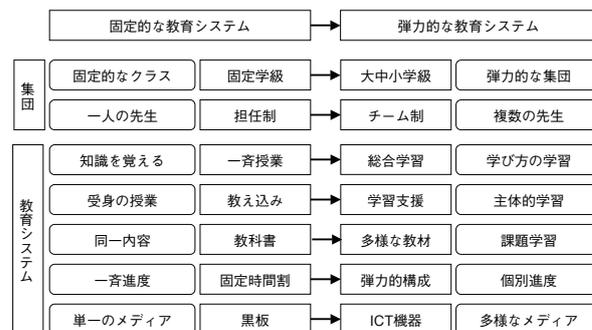
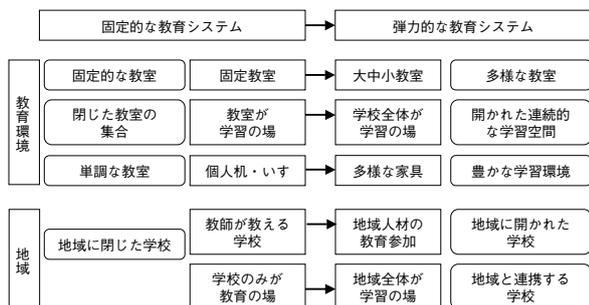


図1 教育システムの変化 (1)



「日本建築学会編，建築設計資料集，総合編（平成13）」を参考に作成

図2 教育システムの変化（2）

オープン教育もしくはアクティブラーニングの動向は，学校教育での試みの延長線上にあるものと位置づけられるであろう。

2.2 オープン教育に対応した施設・設備

それでは，オープン教育に対応して，どのような施設・設備が求められるのであろうか。

従来の学校では，固定的な教室だけが教育の場で，画一的な個人の机と椅子という家具だけであった。一方，オープン教育に対応した施設・設備としては，「チームティーチングが展開しやすく，教室まわりへの多様な学習メディア・家具の配置が大切」であり，「教室の高機能化，自由度の高い学習スペースの確保，図書館・コンピュータ教室を中心とした全校の情報化，教室相互の有機的な関係，管理諸室の再構成等が課題となる」のである¹⁰⁾（写真3，4）。

わが国の学校施設では，1980年代頃からこのようなオープン教育への対応がはじまっている。自由度が高く変化のある学習空間で，多様な家具を配置し，多彩な学習メディアを活用した授業が展開できるような施設設計となっているのである¹¹⁾。

このような学校全体のオープン教育対応は，近年の学校図書館の施設・設備にも影響を及ぼし，学校図書館自体もオープン化を進めることとなった。例えば，恵泉女学園中学・高等学校の図書館に相当するメディアセンターでは，「図書・オープンスペース」と呼ばれる閲覧室のほかに，2つの学習室，2つのコンピュータ教室，そして放送室まで備えている。このメディアセンターでは，生徒が自主的に学習するだけでなく，そこでオープン教育に対応した授業を行うことが可能な

施設として設計されている（写真5，6）。

玉川学園のマルチメディアリソースセンター（MMRC）も同様に，2つのマルチメディアシアター，オープンスペース，コンピュータ・メディアラボなどの多様な施設を備え，多様な教育に対応できるようになっている¹²⁾。



写真3 固定的な教室



写真4 可動的な教室



写真5 恵泉女学園メディアセンター



写真6 同センター内の教室

2.3 大学図書館のオープン化

大学教育のオープン化が今後さらに進展することを想定すると、大学図書館もそれに対応した施設・設備を備えなくてはならないと予測している。すなわち、自学自習の場・学習の場としてだけでなく、教員がオープン教育を実施できる場としての「教室スペース」の必要性が高まると考えているのである。

なぜならば、学生に自主的能動的な課題解決型学習を行わせるには、大学図書館が提供する多様な学術情報こそがもっとも重要な情報源であるからである。それらの情報源を活用しつつ、主体的な学習行動をさせるには、講義室ではなくて図書館がもっとも適切な教育の場となりうると考えている。

1989年に情報化社会における情報リテラシーの重要性を指摘した著作『情報を使う力』でも、図書館が最適の教育の場であることを論じており、この見解は、とりわけ目新しいものではない。すなわち、「図書館はすべての学問分野の知識が有意味な枠組みの中で関連づけられている場である。図書館は卒業した学生が働き、生活していかなければならない情報環境のモデルを提供する。また図書館は無限の情報宇宙における問題解決のための自然環境」なのである。この著作の刊行から約20年経た現在、図書館はICT技術をそなえたラーニング・コモンズという衣装を身につけることで、「教室と図書館とのギャップを埋め」るための施設・設備として、生まれかわることができたのである¹³⁾。

既に国際基督教大学のオスマー図書館では、マ

ルチメディアルームを設置しており、幅広い分野の授業で利用しているという¹⁴⁾。今後はそのような固定的なマルチメディア教室だけではなく、東京大学のアクティブラーニングスタジオのように、レイアウトが自由で多彩な家具を備えた教室が、大学図書館の中に出現することになるであろう。

前述の神田外語大学のSALCでは、ブレンデッドラーニングスペースという多機能型教室6室を併設している。ここは、本格的な映像・音響設備を備え、家具のレイアウトが自由で、授業の様子がひとめで分かるガラス張りの空間となっている。さまざまなスタイルの授業や、公開講座などの社会貢献活動にも活用されている。またSALC内にあるELI (English Language Institute) ラウンジでは、ソファでくつろぎながら38名のネイティブ・スピーカーとコミュニケーションを楽しめるようになっている。ラウンジまでもが、オープン教育の場として機能しているのである。1階にPCエリアやスタジオ、製作ルーム、プレゼンテーションルーム、マルチパーパスルームなどを備えたメディアプラザを併設するこの建物「SACLA」は、現時点でのラーニング・コモンズの到達点を示す施設であると考えられる(写真7, 8, 9, 10)。

さらにSALCでは、ワークショップを開催したりオリジナル教材を作成したり、またオンラインのライティングセンターを開設したり、教育を支援する幅広い活動を展開している。施設・設備のみならず、サービス面でも教育に深く関与する組織となっているのである。



写真7 ブレンデッドラーニングスペース



写真8 ELI ラウンジ



写真9 メディアプラザ



写真10 神田外語大学6号館 SACLA

3. 生活の場としてのラーニング・コモンズ

3.1 大学における生活の場

ラーニング・コモンズを語る時、カフェやラウンジなどの居住性を高める要素が着目されている。この居住性という視点から、ラーニング・コ

モンズを検討してみることとしたい。

大学についての考察の前に、小中高校におけるラーニング・スペースについて確認し、比較の対象としてみよう。小中高校では、基本的に生徒はクラスルームもしくはホームルームをもっている。そこを学校における生活の場(コミュニティ)としながら、その教室で授業を受けることとなる。あとは各科目の必要に応じて体育館や理科・音楽などの教科教室、パソコン実習室、図書室などに移動して学習する。生徒の行動は、居住性の高い生活の場である教室と、学習支援機能が高い教室の間の行き来となっている(図3)。

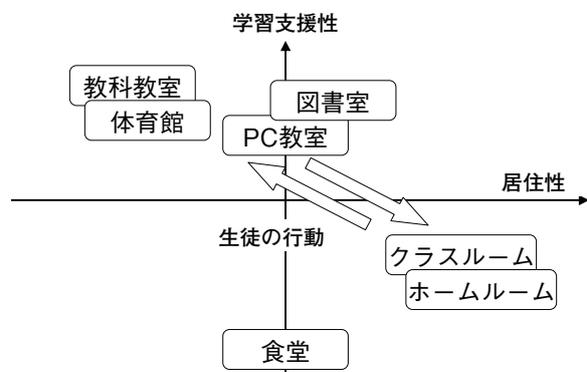


図3 学校のラーニング・スペース

これに対して、大学における学生の生活の場は、次のようになっている。分析の対象は、主に低年次の学部学生とする。高年次となり所属する研究室が確定すると、研究室が居住の場となることが多く、その行動様式が大きく変化するからである。

学部学生が多くの時間を過ごすのは、何よりも講義室(教室)である。ここで授業の時間を過ごしつつ、休み時間に他の講義室や体育館・教科教室・パソコン実習室などに移動する。時間があれば図書館や自習室で学習するであろう。また、昼食時には食堂やカフェなどを利用する。学部学生の行動は、居住性のあまり高くない講義室・自習室と、同じく居住性があまり高くない各教室の間の行き来となっている。(図4)

ここで学校と大きく違うのは、大学生にとって居住性の高いスペースが大学に欠如しているということである。学部学生には、クラスルームやホームルームのような生活の場(コミュニティ)が存在しないのである。

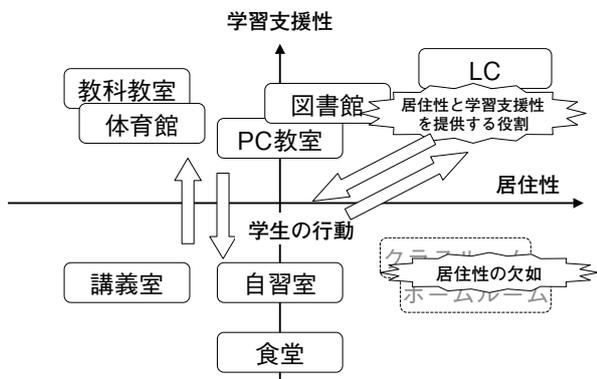


図4 大学のラーニング・スペース

このような状況の中で登場したラーニング・コモンズは、大学の中で居住性を備えたラーニング・スペースとして歓迎されるのは、当然のことといえよう。自主的な学習もでき、ゆっくりとくつろいだ時間も過ごせ、仲間たちとのコミュニティで利用できるのであるから。

米国の図書館を見聞してきた江上氏は、この辺の事情を次のように断じている。「要するに、それまで学生にとって長時間集中して学習できる居場所がほとんどなかったところへ、場所、機器、人的サービスのそろったLC〔ラーニング・コモンズ〕が誕生した、ということになる。その成功はあらかじめ約束されていたようなものだろう」¹⁵⁾。

3.2 キャンパス計画の視点

このようにみえてくると、実はラーニング・コモンズのような機能を果たすスペースの必要性は、大学図書館だけの問題ではないことに気がつくであろう。それは図書館だけの問題ではなく、何よりもキャンパスとしての学部学生の生活環境づくりの問題なのである。この点を看過しないで、大学全体として学部学生のためのキャンパス計画を検討する必要がある。ラーニング・コモンズは、そのための一つの解決策と位置づけることができるのである。

そしてその具体的な解決策は、事情を異にするキャンパス毎に適切に企画する必要がある。単なる図書館の活性化策としてではなく、キャンパスのどこにどのような施設・設備が必要なのかという視点で、適切な判断をするべきであろう。この

点に関しても江上氏は、前述の文献で次のように的確にコメントしている。「昨今話題となりがちなLCや図書館カフェだが、たんなる図書館生き残り策としてではなく、キャンパス内やその周辺を含めて、学生の居場所がどこにどれだけあるのか、学生の生活と行動に見合っているか、全体のバランスの中で議論すべき問題ではないだろうか」。このように大学生、とりわけ学部学生の生活への問題意識をもつことが、ラーニング・コモンズの立案のスタートポイントであると考えられる。

3.3 大学のコミュニティを形成する場

以上のような居場所としてのラーニング・コモンズは、大学におけるコミュニティを形成する場としての可能性も秘めている。なぜならばそこには、図書館員という人的資源が常に存在するからである。

情報リテラシー教育という場面で学部学生を支援することも必要であるが、これからは学生の生活を支援するような役割も重要となるであろう。「図書館員は評価しない教師」という言葉があるが、経験豊富な大人として、学部学生が安心して相談できるような人材とサービスを望みたい。

ワシントン大学に勤務するヨコタ氏は、「学部生に、『安心感と帰属感を得られる居場所』を提供できるように努めている」と述べている。そして、「広大なキャンパスの中で孤立感を感じずに、そこに行けば友人がいる、自分の将来の成功を願い、笑顔で自分を迎え、勉学を助けてくれる大人(ライブラリアン)が必ずいるという安心感を提供したいと願っている。図書館は学生にとって集いの場所以上の『第二のホーム』でありたい」と希望している¹⁶⁾。

一方、東京女子大学の学生協働サポーターやお茶の水女子大学のアドバイザーなど¹⁷⁾、学習支援の場であるラーニング・コモンズの活動の中でも、学生と教員が、そして学生と図書館職員が交流し、ひとつのコミュニティを形成することができるのではないだろうか。そのような思いをもち、ラーニング・コモンズの理想を求めて行きたいと考えている。

4. ラーニング・コモنزの構成要素

4.1 コンテキストに応じた構成要素

ラーニング・コモنزの構成要素を議論するむきもあるが¹⁸⁾、「3.2」に述べたようにそのキャンパスのおかれた状況、いわばキャンパスのコンテキストに応じて、必要な構成要素を検討する必要がある。すなわち、ラーニング・コモنزに多種多様な事例はあるにせよ、標準的・規範的なモデルといったものはありえないのである。

それにしても、コンテキストに応じて必要な構成要素を検討するためにも、想定できる構成要素の例を示すことには意味があろう。以下、本稿の構成に従い学習・教育・生活という3つの場面に区分けて、その構成要素を示すこととしたい。

4.2 施設・設備と資料

学習の場としてのラーニング・コモنزには、共同学習スペース（グループ学習室）やPCクラスタ（PC学習スペース）、プレゼンスペースという構成要素がある。図書館カウンターも学習を支援する設備となる。参考図書などの図書館資料は、自主的学習を支援する情報源として活用される。

教育の場としては、PC教室やICT機器のほか、オープンスペースやPCクラスタ、プレゼンスペースなども構成要素として機能しうる。教育の場では、図書館資料も最大限に活用される。

生活の場としては、ラウンジやカフェ・食堂、自動販売機・ショップなどが構成要素となる。オープンスペースも生活の場となろう。軽雑誌・軽読書用の資料や映像資料などが、学生の生活を潤すものとなろう。（図5）

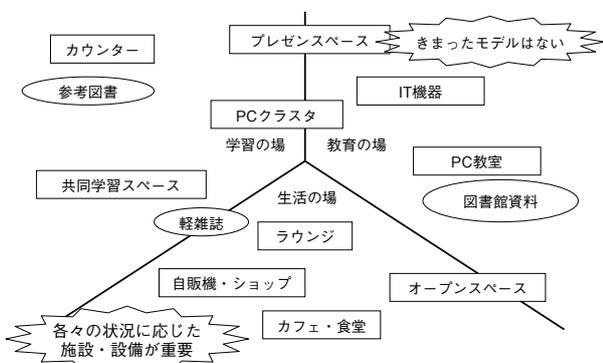


図5 ラーニング・コモنزの構成要素 (施設・設備, 資料)

4.3 サービス

これらの施設・設備と資料を構成要素と位置づけたところで、次にそれらを活用したサービスもラーニング・コモنزの構成要素として示すことにしたい。施設・設備や資料などのハードウェアだけではなく、サービスもラーニング・コモنزの重要な構成要素だからである。

学生の学習活動を支援するものとしては、従来型のレファレンスのほかに、学習アドバイス、ライティング支援などのサービスが考えられる。

ラーニング・コモنزを活用した教育活動としては、授業そのもののほかに、講習会、IT支援が考えられる。また、オープンスペースなどを活用した発表会や展示会などの各種イベントも、一つの教育的活動といえよう。

生活に関わる活動としては、オープンスペースを使ったサークル活動や地域交流活動などが考えられる。さらに今後は、「3.3」に述べたような学生に対する生活アドバイスなどのサービスも考えられるのではないかと考えている。（図6）

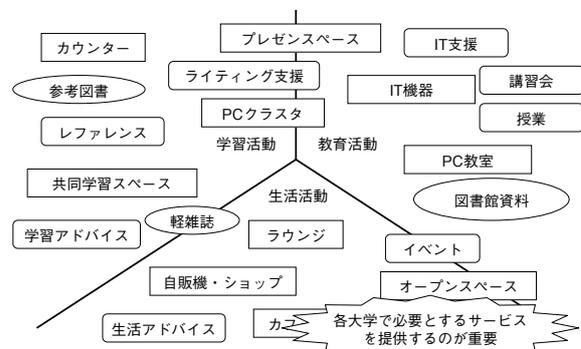


図6 ラーニング・コモنزの構成要素 (サービス)

このように、各キャンパスで必要とするサービスを検討し、学生に対して最大限提供するのがラーニング・コモنزの使命であるともいえる。ICT時代において再び、図書館としてできる限りの学生志向サービスを再構築する場が、ラーニング・コモنزなのではないだろうか。

5. 情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設としての図書館

5.1 大学教育の目標としての情報リテラシー

今や情報リテラシーは、「情報の必要性を判断し、アクセスし、評価し、効果的に利用することができる能力のことである」¹⁹⁾ というように、汎用的で自立的な学習能力であることが広く認知されている。にもかかわらず、わが国の大学教育の現場では、いまだ情報リテラシーとはコンピュータリテラシーと同義という誤解のもと、本来の情報リテラシー教育が体系的に行われることは少ない。文部科学省の『学術情報基盤実態調査結果報告』にも「情報リテラシー教育」という調査項目があるが、内容はコンピュータ利用教育となっている²⁰⁾。

真に重要なのは「情報を使う力」であり、コンピュータやインターネットを使う技術なのではないことは、早くから図書館界では認知されていた。「コンピュータは実際のところ、単なるもう一つの情報源に過ぎないのであり、コンピュータ技術は情報の蓄積とアクセスの単なるもう一つの手段なのである。人々が本当に学ぶ必要がある事柄は、特定の問題解決のために、いつ、どのように、コンピュータおよびコンピュータに蓄積されている情報を用いるかということである」²¹⁾。現在ならば、この「コンピュータ」を「インターネット」もしくは「ウェブ」と置き換えても、十分同意できる論旨であろう。

情報リテラシーとは、どの分野にも通用する自立的な学習能力であり、それは生涯活用できるものなのである。社会人となったときこそ活かすこの情報を使う技能こそ、本来大学教育で習得すべき目標なのである。この技能には「いかに効果的に、効率的に問題解決および意志決定のために必要な情報を見つけ出し、利用するかということが含まれ」、「そのような技能は個人の活動はいうに及ばず、職業面においても幅広い応用力を有するものである」²²⁾ からなのである。

5.2 図書館を中心とした情報リテラシー

この情報リテラシーを獲得するためには、図書館という情報基盤を最大限に利用した、言い換えれば「図書館を中心にとりこんだ」学習がもっとも効果があると考えられる。これは、前出の『情報を使

う力』の見解であるが、筆者のeラーニング授業の実践結果からも実証できたことであった²³⁾。図書館を中心にとりこんだ情報リテラシーの学習には、次のような潜在的価値があるという²⁴⁾。

- ① 自立的に問題解決を行う図書館中心の学習は、膨大な情報の中から自主的に情報を選択する学習能力を獲得させる
- ② 図書館における調査経験は、学習プロセスの当初から最後まで、情報を探索して整理し、それに基づき能動的に行動する能力を養う
- ③ 生涯を通じ、不断に変化する情報から、必要な情報を見つけ出すための探索術を習得できる
- ④ 問題解決による発見型の学習は、教員から与えられるプレッシャーがなく、学習効果が高い
- ⑤ 学生の多様な能力や関心に対応して、図書館は多様な資料を提供することができる
- ⑥ 図書館の多様なメディア資源と学習環境は、学生の嗜好する多様な学習スタイルに適合する

このようにして習得する情報リテラシーは、図書館という「卒業後も引きつづき利用可能な情報源に基づいて組織されるべき」²⁵⁾ であり、そのようにしてはじめて生涯活用できる能力となるのである。

5.3 情報リテラシーとオープン教育

ここまで論じてくると、図書館界で議論してきた「情報リテラシー」の理念と、教育界で進めてきた「オープン教育」の理念が、きわめて類似していることに気がつくであろう。あらためて確認すると、オープン教育とは、次のような理念に示されるものである²⁶⁾。

- ① 教授より学習に重点がおかれるべきである。
- ② 学習者は一人の人間として取り扱われるべきである。
- ③ 教育は学習者の個性と独自性を維持するように務めるべきである。
- ④ 学習者の思考力の発達を図ることが基本である。
- ⑤ 学習者自身の現実との関連において学習は考えられるべきである。

このように、オープン教育は学習者の自主的学習に重点をおき、一人一人の個性と独自性を尊重するものである。そして、思考力の発達を図ることを基本とし、学習者の興味や関心にそって多様な教材により学習をすすめるものなのである。

「2.1」での論述もふまえて、情報リテラシーとオープン教育を対比すると次のようになる(図7)。情報リテラシーが学習を「情報」という視点でとらえているのに対し、オープン教育は広く「学び」という視点でとらえている点に違いがある。しかし、それは教育段階の違いによる視点の異なりにすぎず、本質的に両者は同方向の理念なのである。このことは、すでに学校教育においては、学校図書館を活用したオープン教育が、優れた実績をあげていることから明白である^{27,28)}。

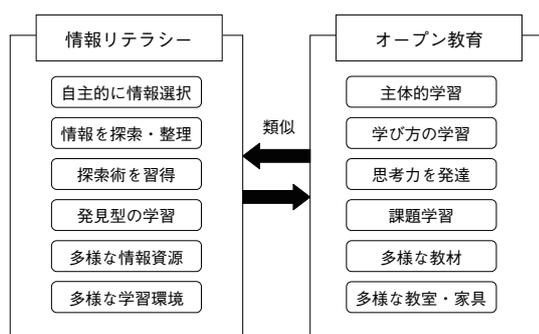


図7 情報リテラシーとオープン教育の類似性

つまり、情報リテラシーが目標となる能力側から展開した理念であるのに対し、オープン教育はプロセスである教育手法側から展開した理念なのである。この2つの理念は、おそらくは目標もプロセスも共有できるものであり、協同して研究・開発するべきものであろう。この点については、図書館学と教育学の研究者による、なお一層の調査・研究を期待したい。

さて、ラーニング・コモンズとは、学生の自主的学習の場、教育のオープン化にともなう新たな教育の場、大学における生活の場という意義をもつことをみてきた。すなわち、ICT時代における大学生の、学習・教育・生活の全般を支援する施設・設備であった。そして一方、大学教育で目標とすべきは情報リテラシーであり、大学教育でとるべき手法がオープン教育であった。

ゆえにラーニング・コモンズは、情報リテラシー

もしくはオープン教育を、最適に実現する基盤施設に位置づけられると考える。学生の自主的「学習」も大学における「生活」も、広い意味での「大学教育」に含まれるとあってよいからである。ラーニング・コモンズは、ICT時代における情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設ということになるのである。

6. おわりに

ラーニング・コモンズとは、ICT時代における大学生の学習・教育・生活活動を、各大学もしくはキャンパスのおかれたコンテクストに応じて、最適に支援すべき場であることを考察してきた。そしてラーニング・コモンズの本質は、情報リテラシー／オープン教育を実現する基盤施設であるとの結論にいたった。

このことから、大学の教育という目的のために、私たちは不断に、どのような施設・設備が必要であるか、どのような図書館資料が必要であるか、そしてどのようなサービスが必要であるかを考えていかなければならないのである。

そして、ラーニング・コモンズの活動を契機に、図書館が大学教育の中心であることを再認識し、図書館および図書館員は大学教育への関与を深めていくべきであろう。そして、ラーニング・コモンズを含めた図書館全体が大学教育の中心に位置する意味について、広く学内の理解をえていく努力をしなければならないのである。

引用文献・参考文献

- 1) 米澤誠. インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援. 『カレントアウェアネス』. 2006, 289, p.9-12
- 2) トレンド14: インフォメーション／ラーニング・コモンズ. 『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館) 報告書: 教育と情報の基盤としての図書館』. 国立大学法人筑波大学, 2007, p.74-76
- 3) 井上真琴. 学習と知の創造空間: ラーニング・コモンズ(これからの図書館を探して). 『ミネルヴァ通信』. 2007(6,8)
- 4) トレンド4: 仮想的学習環境(VLE). 『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館) 報告書: 教育と情報の基盤としての図書館』. 国立大学法人筑波大学, 2007, p.26-28
- 5) 米澤誠. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み. 『医学図書館』. 2007, 54(2), p.160-165

- 6) 橋本春美. 東京女子大学「マイライフ・マイライブラリー」. 『IAAL ニュースレター』. 2008, 2, p. 7-8
- 7) 神田外語大学 SACLA. (オンライン) <http://www.kandagai.go.ac.jp/kuis/sacla/> [accessed : 2009-01-07]
- 8) 林一雅. KALS アクティブラーニングの試み. 『丸善ライブラリーニュース』. 2008, 2, p. 10-11
- 9) 山内祐平. 情報通信技術と大学教育の変革. 『丸善ライブラリーニュース』. 2008, 1, p. 2
- 10) 日本建築学会編. 『建築設計資料集成. 総合編』. 丸善, 2001, p. 364-365
- 11) 日本建築学会編. 『建築設計資料集成. 教育・図書』. 丸善, 2003, p. 2-3
- 12) 河西由美子. 玉川学園マルチメディアリソースセンターの挑戦. 『季刊文教施設』. 2006, 26, p. 26-29
- 13) パトリシア・セン・ブレイビク, E. ゴードン・ギー著, 三浦逸雄 [ほか] 訳. 『情報を使う力: 大学と図書館の改革』. 勁草書房, 1995
- 14) 畠山珠美 [ほか]. 『図書館の再出発』. 大学教育出版, 2007, p. 36-38
- 15) 江上敏哲. UMass Amherst のラーニング・コモンズ: 94% の学生が週1 で訪れる場所. 『大学の図書館』. 2008, 27 (8), p. 164-165
- 16) ヨコタ=カーター啓子. 図書館=大学の知的交差点: 大学教育改革と図書館の変化. 『情報管理』. 2008, 51(7), p. 528-531
- 17) 茂出木理子. ラーニング・コモンズの可能性: 魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ. 『情報の科学と技術』. 2008, 58 (7), p. 341-346
- 18) Susan McMullen, US academic libraries: today's learning commons model, PEB exchange, 2008, 62, p. 1-6
- 19) ACRL, Information literacy competency standards for higher education, 2000 (オンライン). <http://www.ala.org/ala/acrl/acrlstandards/informationliteracycompetency.htm> [accessed : 2007-5-1]
- 20) 上田修一. 大学生の情報リテラシー. 『IAAL ニュースレター』. 2008, 2, p. 1-2
- 21) 前掲 13)
- 22) 前掲 13)
- 23) 米澤誠. eラーニングでのレポート作成授業の実践と成績評価. 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』. 2007, 2, p. 237-243
- 24) 前掲 13)
- 25) 前掲 13)
- 26) オープン・エデュケーション. 『新教育学大事典』第1巻. 第一法規出版, 1990, p. 266-268
- 27) 山形県鶴岡市立朝陽第一小学校編著. 『こうすれば子どもが育つ学校が変わる』. 国土社, 2003
- 28) 山形県鶴岡市立朝陽第一小学校編著. 『みつける つかむ つたえあう: 学校図書館を活用した授業の創造』. 国土社, 2006